

「誰も置き去りにしない、
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育てるために」



未来 Watch

みらいウォッチ

生き抜く力にあふれた子どもたちを育てるコミュニティー

【インフォメーション】

ホームページ開設のお知らせ

私たちの活動をより広く知っていただくために、ホームページを開設しました。さまざまな状況で教育に奮闘されている方々に向けた、教育関連の情報を随時更新しています。是非ご覧ください！



教育現場こそ、未来を創る最前線

長年子どもたちと向き合ってきた元校長が贈る、教育現場で奮闘する方へのエール



知られざる、被服の役割と効果

私たちが社会生活を送る中で、重要な役割を担っている被服のお話



心が通い合うコミュニケーション

人生を豊かにするヒントとなる、生き生きワクワクするコミュニケーション



まわそう！学びのサイクル

将来の夢を描き、チャレンジする力を育てるための視点



<https://nikke-edu.org/>

一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる環境づくり」に参加していただけますか？子どもたちは「未来の宝」です。私たちが発信する未来の宝を育てる情報を、学校・家庭・地域で是非ご活用ください。入会のお申し込みは、ホームページでご案内しています。

編集後記

私たちは互いに思いを伝えあうときに「ことば」を使います。最近では、SNSの浸透により、「ことば」を使って「話す」ことに加えて「書く」という場面が増えてきました。「ことば」の使い方によっては、人を喜ばせ勇気づけることもありますし、思いとは違って人を傷つけてしまうことがあります。「ことば」の使い方は本当に大切だと感じます。人は「ことば」を使って考えますので、実は一日のうちで一番会話が多くの自分との会話です。自分との良質な会話を持つためには、自分自身の気持ちをありのまま感じて、たとえば不安な時は「大丈夫だから」といった前向きな言葉をかけることが、乗り越えていく力につながっていきます。このような習慣を身に着けるためには周りの協力が必要です。子どもたちの考えを批判なく受け取り、寄り添い、勇気づける「ことば」をいつも投げかけてあげたいものです。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長 楠本 景央



2020 秋号（年4回発行）No.03
2020年10月20日 発行
本紙掲載の記事は、複写・複製・転載を禁じます。

《発行》 一般社団法人ニッケ教育研究所
〒541-0048 大阪市中央区瓦町3丁目3-10
TEL: 06-6205-6665



特集

無理なく、楽しく
子どもたちに書かせよう！

連載コラム

学校力 第2回

— 今こそ発揮されるチーム力 —

インフォメーション

ホームページ開設のお知らせ

無理なく、楽しく

子どもたちに書かせよう！

「書くこと」で「考える体質」になる

《関西学院初等部教諭》 森川 正樹 氏

「メモを書く」「日記を書く」「記録を書く」…私は「書く」ということに特別な思い入れがあります。というのも、私の人生は常に「書く」と共にあるからです。今も毎日必ず胸ポケットにはメモ帳とペンを入れてあります。そしてアイデアや素敵な言葉に出会った時はメモをします。それにだけ助けられたことか。書くことがあるからメモをするのではなく、メモをするから「書くこと」が生まれてくる、そんな感覚です。空気を吸うようにメモをしていると、考える力が付きます。気づきも増えます。それを私は私自身の体験によって実感しています。メモは、常に「考える」自分を育ててくれました。そんな「書く」という素晴らしいツールを、教師になってからも子どもたちにも伝えようとして今日に至ります。



「書くこと」は自分を確立すること

子どもたちに「書く力」を付けることは子どもの学びの根幹を支えることになり、必須です。

教師を続けてきて、「書ける」ということは「教室の中での自分を確立できること」だと実感しています。

話し合いをするにしても、「書いたもの」がベースとなります。

考えたことをまとめるにしても、「書き表す」ということができなければ残していくことができません。

自分がそこ(教室)に存在し、考え、発言するための礎となるのが「書く力」なのです。

そのために教師は、「教室の子どもたち全員を書けるようにする」という意識を持っていなければなりませんし、保護者の方も同じく、「書ける子に育てたい」という気持ちを持たれることがスタートになります。到達イメージは、全員の子たちが書ける、それも嬉々として(危機、ではない)書くこととする姿。

本稿では、子どもたちが嬉々として書くこととする姿を実現するために必要な最初のステージである、子どもの書くことに対する「マインド」を作り上げていく、ということについて述べていきます。

マインドリサーチ

例えば六年生で「書くことが苦手」と思っている子は、「書けなかった」という思いが六年間積み重なって、「自分は書けない、書くことが苦手」というマインドがその子を支配しています。我々教師はそこを変え、「自分は書ける」という確固としたマインドを確立させてあげる必要があります。

まずは、クラスの子たちは「書くこと」に対してどれくらい反応できるのかをリサーチします。それには授業や終わりの会、ご家庭ならば寝る前に、「今日の日記(振り返り)」を、書かせてみ

ます。ここでは敢えて特に指導をせずに(気が咎めますが…)、「今日のこと、何か思ったことや感想を書いてごらん。今日を振り返ってごらん」と声をかけるくらいにとどめます。

書き始めたらまずは教室の全体の様子を俯瞰します。すると必ずなかなか書き出せない、「ワンクッション以上置いてしまう子」が存在するはず。そういう子が何割くらいいるのかをザッと把握します。

次に「書かれたもの」から書くのが苦手とおぼしき子を把握します。観点は以下です。

- 0 名前が汚い
- 1 字が読めない
- 2 段落や句読点がない
- 3 2、3行しか書けない
- 4 文意が読み取りにくい
- 5 テーマと合っていない

これらの状態が複合して見られたら、その子は「書くことが苦手」な子です。この「日記」を2、3回行えば、「書くこと」に対してのクラスの状況が見えてきます。

それらを経てクラスの「書くことの状況」を次のように大別します。

- ①半数あるいは半数以上が「書くこと」に抵抗有り
- ②一部「書くこと」に抵抗有り
- ③概ね「書くこと」に抵抗無し

まずはこの教室(家庭)における「状況判断」から始めましょう。

「書ける！」というマインドを確立するために

子どもたちが「書けない」という状態に陥ってしまう大きな要因、それは「自分は書けない」という苦手意識、そして「書くことは厄介なことだ」という悲しき思い込みにあります。そこで、まず

は子どもたちの身体の中に、「書ける！」というマインドを育む必要があります。それでは①～③の状態に合わせた方策を述べます。

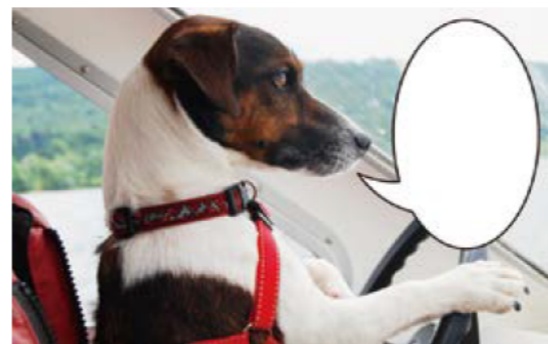
①半数あるいは半数以上が「書くこと」に抵抗有り…のケース

一番やりがいのあるケースです。「さあこい！」とばかりゼロからの歩みを楽しみましょう。

この場合まず一番大切なのは「書けたという事実を残させる」ということ。書くことに苦手意識のある子には、「書けた」という事実をできるだけ早くから積み重ねさせ、それによって、「書けるかも」「書くのって楽しい」と思わせてあげることです。それによって「マインド」を構築させていくのです。

ではその「事実」の作り方。それにはまず書かせるのは「文章」にこだわらないこと。最初は、「言葉」レベルの活動を組みます。例を挙げてみましょう。

- ◇国語辞典の中の「あ」の付く言葉を集めよう
- ◇身の回りの音を書き出してみよう
- ◇人物や動物の写真やイラストを示し、「吹き出し」を書かせる



「吹き出し」例

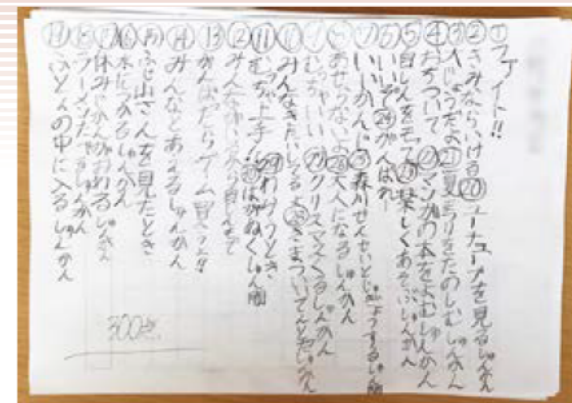
このようなテーマで活動させます。と同時に、書かせる際の「用紙」にも気を配ります。

最初本当に苦手な子が多い場合は、用紙は「ハガキ大」のサイズにします。ハガキサイズならば子どもたちが国語辞典から「あ」の付く言葉を抜き出して書けばすぐに紙面は埋まります。この、「自分の字で紙面が埋まった」という経験が少ない(あるいは無い)のが書くことに苦手意識を抱えている子の実態なのです。しかし用紙を小さくすればその経験を積ませることができ。

用紙サイズを小さくし、言葉レベルの書ける題材で「事実」を残す、ということです。

②一部「書くこと」に抵抗有り…のケース

この場合は、とにかく「楽しく」書かせます。一番適しているのは、教師がお題を指定して楽しく書かせる短作文や日記。私はそういった活動を「作文レシビ」(※)と呼んでいます。例えば「空の色はなぜ青色なのかな?」「幸せ〜って思うのはどんな時?」「私の最高の思い出は?」「先生の気持ちを想像して書いてみよう」といった子どもたちが面白がるような、取り組んでみたくなるようなお題を与えて書かせます。そこには答えや正解はありません。

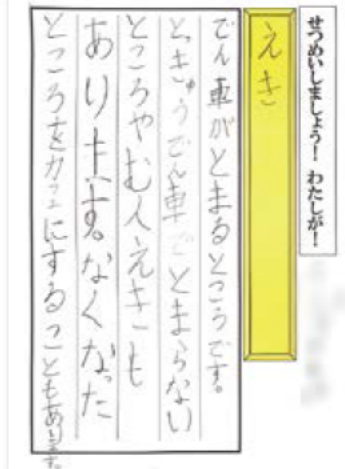


「作文レシビ」の作品 -がんばろう!と思える言葉-

また、そういった「正解の無い記述」に取り組みさせるには早ければ早いほど良いです。高学年になってくると、「正解はどれ?」「恥をかけたらどうしよう」といった気持ちが強く働くようになるからです。「何を書いても良い」感覚は、低学年の頃から養いたいものです。

写真は現在担任している2年生の子の「作文レシビ」の作品です。上の写真は、

「がんばろう!と思える言葉」を書き出させたもの。右の写真は「言葉の意味や事象」を自分で考えさせるレシビです。書かせる時は、漢字の小テストが終わった子から、用紙の裏に書く、とするものや、専用の小さ目のワークシートを作って置いて配布して書かせるなど、「作文レシビ」は上手にスキマ時間を使って取り組ませていきます。



「作文レシビ」の作品 -言葉の意味や事象-

③概ね「書くこと」に抵抗無し…のケース

この場合は学年持ち上りのケースなどです。最初は②で紹介した「楽しく書けそうなテーマ」で書かせるなどした後は、早い段階で「授業の振り返り」(授業の感想)に移行できます。

授業の「振り返り」は学習に対する子どもたちの態度を主体的で対話的なものにします。そしてその「振り返り」を活用すればクラスとしての学びはより深まっていきます。ご家庭ならばそれは家族行事の後に書く「詳細な日記」のようなものになります。

学校でも、ご家庭でも、子どもたちに「書けるカラダ」を育てあげましょう。「書くことって楽しい!」と実感した子は思考し、意識が前向きになり、急激に書く力が伸びてきます。これはずっと教室で子どもたちを見てきた実感です。

「書くこと」を味方に付けた子どもたちが自分の思考を縦横無尽に働かせ、良き学び手として羽ばたく姿を真剣に追い求めたいと思います。

※「小1~小6年 書く活動、が10倍になる楽しい作文レシビ100例—驚異の結果を招くレシビ集」(明治図書)に詳しい。

学校力

第2回

— 今こそ発揮されるチーム力 —



《ニッケ教育研究所顧問》 勝本 孝夫

元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）

＜学校力構築のプロセス＞

- 1 スタートは、基本理念の明確化
- 2 子ども観の確立
- 3 全ては、授業の中に
- 4 安全・安心は総合力で築く
- 5 ゴールは、社会貢献の人材群の輩出

2 子ども観の確立

基本理念が決まると、次は「子ども観の確立」です。子どもの能力、個性とは何か、どのように発達するのか、といった子どもそのものの捉え方です。子どもの捉え方を確認し合い、共有しなければ、学校教育の全体構想（グランドデザイン）は、描けないからです。

梶田叡一氏（元・兵庫教育大学学長、現・桃山学院教育大学学長）は、「子どもへの指導法は、『開・示・悟・入』にあてはまる」という趣旨のことを述べています。（これは、衆生には本来無限の可能性があり、それを「開」き、「示」し、「悟」らせ、「入」らしめる為に説いた釈迦の説法の順序）

氏は、この言葉を、子どもの可能性にあてはめ、次の様に言及しています。

「子どもには無限の可能性がもともと存在しているのであり、

—— チームづくりの視点 ——

“教育は共育”の考え方が浸透すれば、教職員の心と子どもの心が同じ方向を向き、学校組織にまとまりが生まれる

では、秘められた可能性を開いてあげるにはどうすればいいか。それは、“寄り添う”ことです。外から詰め込むのではなく、自主性に任せる単なる子ども中心主義でもない。教職員と子どもが同じ目線で“寄り添う”ことが、可能性を開くカギとなります。

また、我々大人も無限の可能性を秘めていると言えます。つまり、我々の「大人観」でもあるのです。子どもと共に、教職員や親も一緒に向上し続ける存在であるわけです。“教育は共育”の考え方が浸透すれば、教職員の心と子どもの心が同じ方向を向き、学校組織にまとまりが生ま

ふりかえり

私は学校力とは、“学校目標を達成させる「チーム力」”と捉えています。教職員一人ひとりの持ち味を生かしながら、学校が目指す方向へ“ワンチーム”としての学校づくりが、今こそ求められているのではないのでしょうか。

より学校力を伸ばすために、私のこれまでの学校づくりの経験をもとに、チームづくりの視点を絡めながら、左記の5つのプロセスで述べさせていただきたいと思います。前回夏号の①に続き、今回秋号では②と③をお届けします。

その可能性を『開』いてあげるのが教育である。そして、子どもにはその可能性を『示』してあげ、自分自身で『悟』らせてあげ、『入』らしめてあげる（要旨）。

ここで、最も大切なのは、『開』という捉え方です。「人の能力はDNAだ」「いや、環境だ」と、子ども本人ではどうしようもない決定論がまだまだ支配的ですが、“もともと子どもには、無限の可能性が平等に備わっている”という捉え方は、コペルニクス的な子ども観の発想の転換だと感じました。可能性はすべての子に存在しているのであり、発揮されない今は、あくまでも「仮の姿」なのである。その仮の姿から内に秘められた可能性を開いて、徐々に伸ばしてあげるのが真の教育であると痛感します。

れるのを感じました。

さらに、敷衍（ふえん）して言えば、子ども自身が自分の可能性を信じてあげることができれば、自尊感情が湧いてきます。希望と勇気が湧いてきます。希望と勇気は学校生活を送るエネルギーです。そして、他の友だちにも同じように可能性があることが分かり、他尊感情も生まれてきます。自尊感情や他尊感情にあふれた学校には、いじめや虐待、体罰は生まれてこないのではないのでしょうか。真の子ども観の確立は、いじめや虐待、体罰を生まない有効な方策でもあるのです。

3 全ては、授業の中に

次の段階は、「子ども観」をベースにしてグランドデザインの柱である「学校目標」の設定です。

東日本大震災を契機にして、「レジリエンス」という言葉が注目されるようになりました。「克服力」「回復力」と訳されますが、「困難な状況を乗り越える力」との意味があります。今まさに、コロナ禍のこの状況にも脚光を浴びている言葉です。東日本大震災後の復興が叫ばれていた当時、学校目標を「立ち向かい、乗り越える力の育成」に、サブタイトルは、「寄り添い、自尊感情を高める」と設定しました。

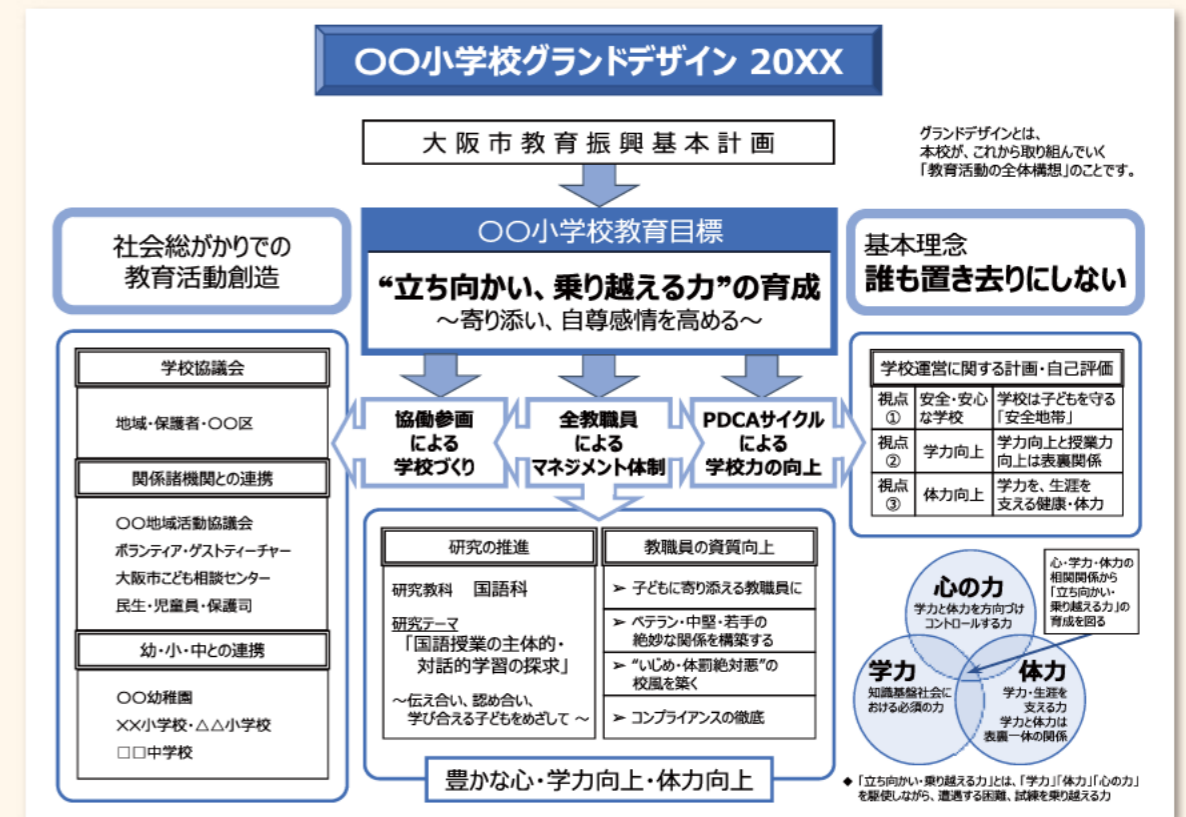
突然襲ってくる自然災害や感染症。これまで積み上げてきた知的物的財産や日常生活が一瞬にして崩壊。自然災害や感染症のみならず、病気や事故、人間関係等、人生は“試練・困難との戦い”であるとも言えます。

学校教育も“試練・困難との戦い”を想定したものに再構築する必要が感じられたのです。そのため、教育活動全般を“試練・困難との戦い”から逆算して捉え直したのです。学校

で学ぶ全ては、“いざという時のためにある”との新たな発想で捉え直す時代であると痛感します。

学校で身につけた「学力」「体力」「心の力」を駆使することにより、「立ち向かい、乗り越える力」、つまり「生き抜く力」（レジリエンス）が発揮されると、意義づけを行いました。グランドデザインの3つの円の重なり部分は、このことを表現しています。

スイスの教育学者であるペスタロッチは「すべての学習は、それに元気と喜びが伴わなければ価値はない」と叫びましたが、私は、常々“学校は学ぶ喜びの場”であり、“生きる喜びの場”であると思ってきました。そのためには、授業の充実が欠かせません。全教育活動を通して「学力」「体力」「心の力」の育成が為されるのですが、とりわけ授業の中にこそ、「学ぶ喜び」と「生きる喜び」が脈動していなければなりません。子どもは、教科の習得を通して生き方を学び、教師の生き方を通して教科を学んでいくのです。子どもが身につける全ては、授業の中に凝縮しています。



—— チームづくりの視点 ——

教師の生き方と学校目標とが乖離しないで、ぴったりと重なり合えば、教師の“思い・願い”の実現が学校目標につながっていく

理想的な授業には教師と子どもとの“人格と人格との磨き合い”があります。まさに、真剣勝負の“共育の場”なのです。真剣勝負のためには、教師自身も「立ち向かい、乗り越える力」の習得を目指して向上していかなければなりません。つまり、教師の生き方の中に学校目標が重なって存在するのです。

教師の生き方と学校目標とが乖離しないで、ぴった

りと重なり合えば、教師の“思い・願い”の実現が学校目標につながっていきます。

IT教育やオンライン授業を活用していく時代になってきつつある今、“人間と人間の結びつきがある授業”をより充実・深化させることが、Withコロナ時代の学校教育には、ますます必要ではないでしょうか。